

「日本、つぶれたんちやうか」

タレントの間寛平(四三)は、兵庫県宝塚市売布一(一)の自宅一階寝室のベッドで、

出した。

バジヤマ代わりにスエットを着て熟睡していた。前夜のビール四本のせいで、夢も見ない。頭の中で物が裂けるような音。えたいの知れない物が床下の地盤を破って飛び出してきたような感じ。倒れてきたたんすをかわすと、布団をかぶり、うずくまった。「一体、何やねん」

「お父さん、子供連れて逃げて」。二階から妻光代(三三)の叫び声。中学二年の慎太郎(三三)が階段を下りてきた。階段の手すりは吹き飛んでいた。「あーあ、これで日本の文化も終わりかあ」「何、アホなこと言うてんのん。はよ、子供連れて行って」。光代にどなられ、いっぺんに目が覚めた。

慎太郎の手を握り、ジョギングシューズをはき、前の公園へ逃げた。まだ、暗く、だれもない。犬の鳴き声がやたら耳につく。再び家へ戻った。崩れ落ちた外壁と倒壊したブロック塀のそばに光代と高校一年の美代(二六)が立っていた。義母かやの(三三)はいち早く脱出していた。

ホッとしたのもつかの間、北隣の家から悲鳴があがった。「えらいこっちゃ」。駆け付けると、家族が出てきた。「娘が中にいますねん」。寛平は家に飛び込み、うずくまっていた高校生の娘を公園に連れ

「一体、どないなつてんねん。近所の周辺を走った。ランナーとしても知られ、三十六時間以内に二百四十六キロを走破する「スパルタスロン」など内外のレースに出場。三月二十六日にロサンゼルスで開かれる「デイズニールランド・マラソン」では、三時間を切るのが目標だ。

大きく傾いたり、一階が押しつぶされたりした家。また家。足が止まった。二つ目の角を回った井内俊雄(四三)の家では、妻の葉子(三三)と義母時子(七三)がつぶれた一階で生き埋めになっていた。「これは、やばいで」。寛平が近所の人から懐中電灯を借り、二階の窓から入って、「おーい」と呼ぶ。時子の「はーい」というか細い声。

「はよ、助けなあかん」。ドアを蹴破ろうとしたが、無理だった。また走り始め、走りながら「だれか来てくれー」と、必死で応援を求めた。

付近の男性六人が駆け付けた。それでもらちが明かない。空が白み、周囲の惨状が目に見え込んできた。全国規模の地震だと思った。「東京は全滅、日本はつぶれたんちやうか」。携帯電話を取り出し、吉本興業東京支社のチーフ・マネジャー谷良一(二六)を呼ぶ。一回で通じた。「そっちは大丈夫

か」。寛平のあせり声とは対照的に「一体、何ですか」。谷は平然とした調子。状況を伝えると、「そんなあほな。絶句した。どうやら東京は大丈夫らしいが、阪神と東京、その距離分だけ緊迫感は薄れている」。

長話はできない。すぐに電話を切り、二人の女性の救出方法を考えた。「そや、ブルドーザー借りよう」。近くの光代の親せきが建材店だった。その店へ駆け込んだが、不在。

「もう一軒あるわ」。息子を乗用車に乗せ、別の建材店へ。息せき切って店内に入り、「おっちゃん、ブルドーザー、貸してえなあ」。店主は「勝手に使って、傷つけたら責任問題になりませ。やめときなはれ。そう言われると仕方がない。現場へ引き返した。時子はすでに救出。住民は十人に増え、二階部分をジャ

ッキで持ち上げていた。どこから持ち出したか、皆が手持ちの道具を使って自分出来る方法で救出活動を始めていた。寛平は電気のコギリを受け取り、壁、柱、家具などを切断した。

ようやく救出できた葉子はぐったりしている。車で病院へ運ばれた。「こんなひどいことになってもうて、どないしたらええねん」。何度も何度もその言葉を繰り返しながら、また走り出した。じっとしていられない。

自衛隊も警察も、そして消防もまだ、がれきの現場から遠くにいた。



兵庫県薬剤師会館

1967年、総工費9600万円で建設。6階建て。県薬種商協会など9団体が入居していた(神戸市中央区、1月17日撮影)